

地域の課題解決と プロデューサーシップ

～多様な立場を活かしてスキマを埋める～

2018年5月12日

株式会社コスモピア
代表取締役 田子みどり

地域の課題解決と プロデューサーシップ

～多様な立場とネットワークを活かしてスキマを埋める～

株式会社コスモピア
代表取締役 田子みどり

はじめに

古い友人である中原新太郎さんより、研究・イノベーション学会「既存知識の新結合によるイノベーションでの地域活性化」サブ研究会にて、私の地方における取組を発表せよという課題をいただきました。はて？私は地域の課題解決に、貢献できているのか否か？。

確かに最近の私は、頻繁に地方出張をしております。その大半が山口県内、特に萩市であるのは、そこが私の故郷であるからにはかなりません。それは一般的には帰省というのではないか、と言われるかもしれませんが、私の場合、既に両親は他界し、育った家もなく、係累と言えはわずか一組の老いた叔父叔母がいるのみ。故郷に帰っても、旅人のように宿に泊まるしかありません。兄弟が集まると話題になるのは、両親の入るお墓をいつまで故郷に置いておくべきかという相談。このままでは、故郷との縁はいずれ切れてしまう運命にあります。

そんな不義理をしている者が、故郷の課題解決などとエラそうに言っているのか。しかし残念ながら、「ふるさととは遠きにありて」思っているだけではやがて消滅してしまう危機があります。その代わりに、その地に住んでいなくても、インターネットでリアルに課題を認識してアクションを起こせる時代でもあります。

私には私にできる方法で、故郷に対してできることがあるに違いない。それは、ゆるやかに何かと何か、誰かと誰かをつないで、何かを生み出すきっかけをつくることではないかしら、と今はぼんやり考えています。それが地域の課題解決のささやかな一助となり、自分自身の生きている証にもなるのではないかと思うのです。

1. 生い立ち

私は、1960年(昭和35年)、市役所に勤める父、小学校教員の母という公務員家庭の3番目の子どもであり初めての女兒として、山口県萩市に生まれました。当時の萩市は明治維新の立役者たちを輩出した町として、多数の観光客が訪れ、小さい町ながらそれなりに賑わっておりまして。三方を山、一方を海に面した豊かな自然に恵まれ、私はのびのびと自然児として育まれました。

地方都市の宿命で、若者は皆、進学や就職のために萩を出ます。私も例にもれず萩を出て、早稲田大学に進学しました。どうせ萩を離れるなら東京、と自分のなかで決めていました。萩にいと女性の仕事は限られているけれど、東京の大学に行けば道は限りなく広がるに違いないと夢を膨らませての進学でした。

しかし当時はまだ、雇用機会均等法の影も形も見えない時代。東京と言えど、就職において大卒の女子には狭き門しか開かれていませんでした。しかも、地方出身女子は不利、と言われた時代。学校の講義にも飽き足らない私は、なにかアクションをしてみようと、個人の企画事務所に入門し学ばせてもらいました。そこに集まっていた女子学生たちと仕事の実践の場として作ったグループが、株式会社コスモピアの前身です。

私の動機は、事務所を通じて与えられた仕事をこなすことで、会社とのコネができて就職のチャンスができるのでは、という下心でした。最初の仕事は、経団連の軽井沢フォーラムというイベントの中で、1時間の出し物を企画演出出演する、というものでした。そのテーマに、未来の情報通信を盛り込んだことで、財界や通信業界、広告業界とご縁ができ、マスコミに取り上げられて次々と仕事が舞い込むようになりました。そこで、大学卒業と同時に「科学技術をわかりやすく伝える」ことを活動とする株式会社コスモピアを設立、私が社長に就任しました。1983年(昭和58年)のことです。

会社の経営は現在(2018年)でちょうど35周年となります。バブルが崩壊したり、リーマンショックが起こったり、さらには東北大震災も発生して、日本経済は大波小波ざんぶらこ。結婚、出産、離婚、再婚と人生の荒波もくぐりました。その間、父が早逝し、母が上京して子供をみてくれるなどして、実家に帰省する機会はありませんでしたので、同窓会にも顔を出さず、音信不通でどうしているかわからない人、と思われていたことでしょう。

2. NPO 法人ふるさと山口経営者フォーラム

故郷との関わりが再開したのは、高校卒業して30年後に当番が廻ってくる高校の東京同窓会の幹事役がきっかけでした。2008年、今からちょうど10年前です。数十年ぶりに同級生と顔を合わせたとき、故郷が寂れてきていることを聞いて、大切なものを置き去りにしてきたような、苦い思いが胸に湧きました。とはいえ、売上が数億程度の中小企業の社長には、故郷に錦を飾るようなことは経済的にできません。

ちょうどその頃、山口県庁の職員から、東京で起業した山口県出身のベンチャー企業の社長が集まっている会の会長をしている杉山敏美さんを紹介したいと言われました。私と同

年代の山口県出身の女性起業家で、故郷に何か役立ちたいという思いをもっているから、話が合うのではないかと、ということでした。

その会では、山口県の生産者を東京のマーケットにつなぐために大掛かりなイベント開催したり、経営者同士の交流会を開いたりしていました。山口県は日本海側と瀬戸内側、さらに山間部では、自然も文化も違います。メンバーには防府市出身の会長はじめ、下関市、岩国市など、それまで縁のなかった萩市外の出身の人が多く、山口県ひとつとってもこれだけ多様性があるのかと目から鱗の思いでした。

その後、2013年(平成25年)、その会はNPO法人ふるさと山口経営者フォーラムと生まれ変わり、現在私は常務理事事務局長を務めています。プロパーな職員は雇わず、会員(社長たち)の手弁当で活動しているため、大それたことはできませんが、毎年山口県を再発見する旅行を企画したり、東京の経営者と地元の経営者の交流会を行ったり、クリスマスパーティを開催して収益を故郷の児童養護施設に寄付したりと、それなりに実績を残しています。

NPO法人格になったことで、行政などからの委託事業も受けられるようになりました。首都圏から山口県への移住創業の促進事業として「山口県 UJI ターン創業セミナー～おいしい創業やまぐち～」は既に10回を重ねており、セミナーを受講したUJIターン移住者が創業する実績も出ています。

そして何より誇らしいのは、会員がそれぞれ自分の事業の一環で、故郷への貢献を始めていることです。自社のサテライトオフィスの設置やゲストハウスの創設、新規事業展開など、次々と事例が出ています。県や各市のふるさと大使に就任する人も多く、実際にUターンする会員も後をたちません。

3. 萩市ふるさと大使

前述の経営者の会がNPO法人になったのと時を同じくして、2013年(平成25年)、私は出身地である萩市から「萩市ふるさと大使」を拝命いたしました。

萩市役所のホームページには、ふるさと大使について、「萩市では、様々な分野で活躍されている方々を通じて、本市の歴史、文化、芸術、自然、特産品などを全国に情報発信するとともに、まちづくりに有益な情報を及び助言を得ることにより、本市のイメージアップと観光、産業振興を図り、もって本市のまちづくりを推進するため、萩ふるさと大使を設置しています」と書かれています。

お亡くなりになった松方弘樹さんをはじめ、芸能人・文化人が多い中で、経営者としての私が就任する意味は何かと言うと、産業振興を図れ、ということだろうと認識しています。資金もなく、経営者として成功しているわけでもない、まさに自分の頭の高みも追えない私が、萩市に産業を興すとは…きっかけを作ることでしょうか。

ところで私は、20代の頃から、一般社団法人東京ニュービジネス協議会(NBC)という、元気のいいベンチャー社長が何百人も集まる団体に所属しており、会員交流委員長、女性活躍委員長、副会長などを歴任、現在は特別理事という隠居職を頂戴しています。

あるとき、NBC の勉強会の中で、萩市に視察に行きたいという声が上がりました。単なる観光ではつまらない。とはいえ、地元の経営者団体と交流するのも形式的になりそうだし。そこで、テーマをベンチャー魂に触れる、という設定にしました。経営者は常にイノベーションに対峙していますので、松下村塾や明治維新の魂に触れてもらうことが、刺激になると考えました。一方で、地元の若手ベンチャー予備軍と交流して先輩経営者から若者へ檄を飛ばしてもらおうことで、地域の産業の活性化につなげたいと考えました。

結果としてこの視察旅行は、双方にとって大変良い刺激になったようです。そのせいかわかりませんが、その時のメンバーの中から、活躍している若手経営者も複数生まれています。NBC の萩視察旅行は現在までに 3 回開催し、その都度構成メンバーによりテーマをアレンジしています。企画にも受け入れにも大変な労力がかかりますが、双方の参加者がとても喜ぶ顔を見ると、大変うれしく思います。

昔に比べると減少したとはいえ、萩市には今も多く観光客、旅行者が訪れます。特に今年は明治維新 150 年とあって、観光 PR が積極的に行われています。しかし、訪れる人々百人いれば百通りの嗜好と動機と目的があるのに、一様に史跡を見せ一様に説明をしても、琴線には触れません。すべての人にオーダーメイドとはいかないまでも、イージーオーダーくらいの旅行プロデュースができないだろうか。ずっと考えている課題です。

4. サテライトオフィスとテレワーク

株式会社コスモピアの経営理念のひとつに、女性の仕事とキャリアを作ることがあり、現在も役員は 100% 女性、社員の 9 割が女性です。早い段階から「在宅勤務」スタッフを登録制で活用していましたが、東北大震災以後は、本社内のクラウド化、フリーアドレス化を進め、営業やバックオフィス系もテレワークが可能な体制を作りました。

テレワークを積極的に導入し十分な実績をあげているとして、2016 年に総務省「テレワーク先駆者百選」に選ばれています。また 2018 年には、女性活躍推進法に基づき、女性の活躍に関する取組の実施状況等が優良な企業として、厚生労働省より「えるぼし」の認定をもらいました。

2017 年春には、萩市の中心に位置する田町商店街の中にコワーキングスペース「So-Say Lab. (そうせいらぼ)」の創設に参画。コスモピアもサテライトオフィスとして入居いたしました。

So-Say Lab. の創設は、東京の IT 会社である株式会社 DankSoft の存在が欠かせません。DankSoft の星野社長と私は、共に一社東京ニュービジネス協議会の古参会員であり早くから理事職についていたことから、公私にわたって懇意にいただき、コスモピアの ICT 化についてもご助力いただきました。

その DankSoft が、サテライトオフィスのメッカである徳島県神山町に深く関わっていたことから、サテライトやテレワークによるイノベーションの可能性について、星野さんから早い段階で学ばせていただくことができました。併せて、萩市役所や山口県庁にも、そのノウハウを提供いただきました。星野さんと私は現在、山口県サテライトオフィス誘致協議会のアドバイザーに就任しています。萩市については、通信状況の調査、サテライトオフィスの実証実験など数年を経て、実際に創設するに至りました。

So-Say Lab. のある商店街は、私の子どもの頃には何でも揃う大変にぎやかな商店街でした。しかし現在はシャッター街と化してしまい、地元の人も出身者も、寂しく思っているに違

いありません。そこにコワーキングスペースができ、市内外から元気のよい若者や女性や、ベンチャー企業が集えば、町は活性化するでしょう。IT スキルが高まれば、萩市に居ながら東京やその他の地域の仕事をする 것도可能です。私は東京で会社を営んでいますが、サテライトオフィスを設置することにより、萩市を自分の仕事の一環に組み入れることを目指しています。

残念ながら、地方におけるコワーキングスペースやサテライトオフィスは、現時点では供給が優先している状態にあります。So-Say Lab.についても、現状はまだ活用されているとまではいえませんが、テレビ会議システムを用いて東京とディスカッションしたり、セミナーを中継したりして、地元の人たちに対して少しずつ存在価値をアピールし始めているところです。

5. 一社) 女性活躍委員会

2018 年に、新たにスタートした活動が、山口市に設立した一般社団法人女性活躍委員会(SWEat)です。

私がかねてより気になっていた故郷の課題のひとつに、女性の就業率の低さ、キャリアの低さがあります。2012 年総務省発表のいわゆる子育て世代「25 歳～44 歳の育児をしている女性の都道府県別有業率」では、山口県は全国平均を下回って上から 38 番目という低さです。近隣でいうと、島根県の就業率はトップ、鳥取県は 4 位。

さらに、役員や管理職に就く女性が非常に少ない。民間企業はもとより、女性が多く働く職場である役所においても、山口県内の公務員における女性管理職の割合は全国的にかなり低位です。社会活動の場でも、地域のさまざまな団体を下支えしているのは女性たちなのに、あたりまえのように年配の男性が会長として君臨することに、私は強い違和感があります。

その要因は、男女の役割に対する固定化した概念が、男性にも女性にも未だ強く根付いているからだと思います。まあ、これは山口県に限らないことではありますが、東京に暮らしている私は、幸いなことに女性であることの限界をあまり感じません。そこで、故郷の女性たちがその状況を息苦しく感じているとしたら、なにか手伝いができないだろうかと思っていました。

そんな折、前述の NPO 法人ふるさと山口経営者フォーラムの杉山敏美会長から、山口県に女性のビジネススクールを作りたい、という相談を受けました。彼女は、東京の自社と、半官半民の女性創業応援やまぐち株式会社の社長を兼務しており、仕事を通じて山口県内には女性がリーダーとして組織で活躍するために必要なスキルや考え方を学ぶ機会が少ないと感じていたのです。

2017 年暮れに、山口大学ダイバーシティ推進室長の鍋山祥子教授(現在は国立大学としては最年少で副学長に就任)にもお声がけし、杉山さんを会長に SWEat を設立、年が明けて記者発表。ところが県内の反響は私たちの想像以上に大きく、特に子育て世代の女性たちから、強い関心と意欲が示されました。

そこでまず、当事者である彼女たちの思いを受け留めようと、参加者主体の活動として始まった活動が、地域の女性たちの交流・情報交換会である Diamond Salon。「watashi 活躍

宣言」というキャッチフレーズのもとに、一人ひとりが主役となり、女性が活躍するための方法をシェアしていこうとしています。

そしてこの秋からは、いよいよ女性のためのビジネススクールを開催する運びで、ただいま鋭意準備中。このプロジェクトには、行政も関心を示しており、7月にはプレスクールを開講する予定です。私自身はなかなかリアルな現場にお手伝いができず、情報提供や声援をおくることくらいしかできないのですが。

6. 間をつなぐ、たくさんのワタシ

以上、ここ数年の私がアクティブに関わる山口県を中心にした地域活動について、紹介しました。それ以外にも、古くは居住区域でPTA会長として活動したこともあれば、諸団体の役員として、あるいは行政における産業政策関連の委員会委員等も多数引き受けてきました。

さまざまな立場を引き受けることは、何一つ専門家といえない自分の能力を超えていると感じたり、生業の仕事よりも時間を割かれて本末転倒ではと悩んだりすることもしばしばです。が最近ではなんとなく、ひとつひとつバラバラに見えている活動や立場が、真珠をつないでネックレスを作るように、ゆるやかに繋がりあって意味を成してきてきているように感じています。

それらを繋ぐのは、35年間会社を経営し、また公私において数々の失敗や苦勞をしながら集積した、私自身の経験知とネットワークによるものです。人はだれでもがそれぞれに、様々な経験知とネットワークをもっています。その気になればだれでもが、地域社会のプロデューサー足りえるのです。

設楽剛事務所の設楽剛先生は、未来社会の中核的存在となるのは強いリーダーではなく、「インターミディエーター」とであると提唱しています。インターミディエーターとは、異なる世界の「あいだ」に立ち、対話と協働によりあいだをつなぎ、新たな需要と未来を創り出す存在。還暦を前にこれから私の目指すべきは「インターミディエーター」として成果を出していくことだ考えています。

田子みどり(たごみどり) 株式会社コスモピア 代表取締役

1960年山口県萩市生まれ。1979年山口県立萩高校卒業、1983年早稲田大学第一文学部日本文学専攻卒業。大学在学中に、女子学生による科学タレントチーム「ザ・コスモス」を結成、経団連軽井沢フォーラムでサイエンスショーをプロデュースし好評を得る。活動を通して、企業社会における戦力としての女子学生への期待値の低さを痛感し、自分たちの仕事作りのために、1983年大学卒業と同時に科学プロダクション(株)コスモピアを設立し、社長に就任。科学技術と一般社会のコミュニケーションを推進する仕事を開拓する。

現在の会社コスモピアの業務は、ICTソリューション(ユーザーサポート、マニュアル制作、研修等)、コミュニケーション・ソリューション(PRツールの作成やショールーム企画運営)、出版物の企画制作、人材派遣等。社員はパートタイム含む約100名、その9割は女性。テレワーク百選に選ばれる。

株式会社コスモピア(東京都千代田区) <http://www.cosmopia.jp>

(公職)

一般社団法人東京ニュービジネス協議会 特別理事、一般社団法人エコ・ペーパーレス協議会 理事、一般社団法人女性活躍委員会 理事、特定非営利活動法人ふるさと山口経営者フォーラム 常務理事事務局長、日本クロスカルチュラル・コミュニケーション協会 常務理事、山口県サテライトオフィス誘致協議会 アドバイザー、萩市ふるさと大使など。(以上現職) 経済産業省、文部科学省、国土交通省、東京都など自治体の審議会等委員を多数歴任。